

## 若年化する名探偵

林 延哉\*

(2009年11月30日 受理)

### A Study of the Age of Private Detectives on TV Dramas

Nobuya HAYASHI\*

(Received November 30, 2009)

#### はじめに

日本社会の高齢化に伴い、若者への待望と若さへの憧れが募っている。

思えば四苦とは生まれ老いて病んで死ぬことであり、老いることへの否定的な感情はいつの世にもあるものなのだろうが、他方では例えば「老酒」というような「老」を尊ぶ見方もある。ちなみに日本は「生一本」と若さを尊ぶと安岡正篤が日中を比較していたが、高齢化社会を問題視することは高齢であることを問題視するという視点でもあり、畢竟相対する若さを貴いものとして求めることにもなる。日頃の学生との雑談の中でも、19歳の誕生日を迎えるあたりで既に自分のことを「おばさん」と感じるようであり、年齢の旬は18歳あたりをピークとしているようでもある。「おばさん」は彼女達にとって、決して肯定的な意味を帯びた言葉ではない。

本小論は、我々の日常が浸かっている若者嗜好・若さ希求の一端を、映像の中の「名探偵」のイメージに見いだすことを目的としている。

#### 金田一耕助と明智小五郎

日本を代表する名探偵といえ、まず江戸川乱歩の創作による明智小五郎、次いで横溝正史の手になる金田一耕助が挙げられるのは異論のないところであろう。

明智小五郎は1925年（大正14年）1月、『新青年』（博文館）に掲載された「D坂の殺人事件」に初めて登場する。以来、1962年の「超人ニコラ」（『少年』（光文社）昭和37年新年号～12月号）に至るまで、多数の作品に登場している。1920年のD坂の事件では、25歳前後、モジャモジャの頭に木綿の着物、よ

---

\*茨城大学教育学部（〒310-8512 水戸市文京2-1-1；College of Education, Ibaraki University, Mito 310-8512 Japan）

れよれの兵児帯といった風体で登場するが、後には英国風の仕立てのよいダブルブレストの背広を着こなすおしゃれな紳士として描かれるようになる。平山雄一は明智の生年を1894年と推定している。とすればD坂の事件の際には31歳ということになる。同じく平山は超人ニコラの事件を1953年頃と推定していて、1894年生まれならば59歳ということになる。ちなみに平山は、明智は1954年に60歳で「海底の魔術師」事件を解決した後に、婦人とともに田舎の山荘に引きこもったと推測している（平山2009）。

一方の金田一耕助は、1946年の「本陣殺人事件」（『宝石』（岩谷書店）1946年4～12月号）で初めて登場する。この作品では、舞台は昭和12年11月に据えられており、この時金田一は20代の青年である。この作品は好評のうちに迎えられ、翌年1月からは同誌で「獄門島」の連載が始まる。『獄門島』での金田一は33歳。本陣殺人事件で他殺と見せかけた無理心中事件を見事に解決した青年探偵は、その後兵役に取られ大陸から南方を転戦、復員後戦友の遺志を継いで、亡き友の郷里獄門島を訪れたという設定になっている。

横溝正史の探偵小説は、敗戦後の大衆の希求にマッチしたのか、早くも1947年には片岡千恵蔵主演で『三本指の男』と題して映画化され、続編も製作された。しかし、1950年代末、松本清張の登場によって始まる社会派推理小説ブームの中で、いわゆる本格ものの影は薄くなっていく。一方の明智小五郎が、とりわけ少年探偵団と怪人二十面相という子ども向けの番組と個性的な悪役によって人々の記憶の中に残り続けたのとは対照的に、金田一耕助と横溝正史は一度は忘れられた存在となっていく。

その忘れられた存在が再び人々の前に登場し、日本を代表する名探偵としての地位を確立するきっかけとなったのが、1976年の角川映画『犬神家の一族』（監督市村崑）である。現在の我々が「金田一耕助」の名を聞いた時に思い浮かべる「お釜帽にぼさぼさ頭、袴に下駄履き」のヴィジュアルを定着させたのはこの映画に始まる映画・TVにおける金田一ものの映像化によっている。

先にも触れたように、金田一耕助の映像化は、既に1947年に始まっている。しかし、1947年の『三本指の男』の金田一耕助は、片岡の当たり役「多羅尾伴内」を彷彿とさせるダンディな背広姿で、原作のぼさぼさ頭、袴に下駄履きの姿とはほど遠い。実は、角川映画『犬神家の一族』の前年、1975年には、高林陽一監督によるATG映画『本陣殺人事件』が公開されているのだが、この作品で金田一耕助を演じた中尾彬の出で立ちにはジーンズをはいたヒッピー風の青年であり、ボサボサ頭を掻き回してフケを巻き散らす姿とはかけ離れていた。やはり、「お釜帽にぼさぼさ頭、袴に下駄履き」の金田一耕助のヴィジュアルを定着させたのは『犬神家の一族』に始まる石坂浩二演じる一連の金田一耕助主演の映画シリーズと、映画『犬神家の一族』の翌年1977年から始まる古谷一行演じるTBS系列の「横溝正史シリーズ」であるのは論を待たないであろう。

『犬神家の一族』（1976）、『悪魔の手毬唄』（1977）、『獄門島』（1977）、『女王蜂』（1978）、『病院坂の首縊りの家』（1979）と続いた角川映画の影響ももちろん大きなものであるのは間違いないが、それに優るとも劣らぬのは、1977年の『犬神家の一族』に始まる古谷一行演ずる金田一シリーズである。当初、1時間ものの連続ドラマとして始まった古谷・金田一シリーズは、1978年にはいったん終了したものの、1983年からはTBS系列の単発2時間ドラマ枠の作品として再登場、以降2005年に至るまでほぼ毎年1～2作品のペースで放映され続けてきた。比較的原作に忠実な造形であったこともあり、1976年・77年の石坂・金田一、古谷・金田一のヴィジュアルは、その後映画・TVで金田一耕助を演じた役者の扮装にも基本的には踏襲されている。

石坂浩二以降、映画で金田一耕助を演じた役者には、『八つ墓村』（松竹、1977）の渥美清、『悪魔が来り

て笛を吹く』(東映, 1979) の西田敏行、『金田一耕助の冒険』(東映, 1979) の古谷一行、『悪霊島』(東映, 1981) の鹿賀丈史、『八つ墓村』(東宝, 1996) の豊川悦司がいる。そして、2006年には、市川崑監督・石坂浩二主演で『犬神家の一族』がリメイクされている。

一方TVでは、古谷・金田一と同年の1977年にテレビ朝日で愛川欽也が金田一を演じ、1980年代には小野寺昭が4作品で金田一を演じている。1990年には同じくテレビ朝日で中井貴一と役所広司も金田一を演じている。フジテレビでは1990年から1998年にかけて9作品で片岡鶴太郎が金田一を演じ、2004年からはアイドルグループSMAPの稲垣吾郎が演じている。他にも、テレビ東京では2002年・2003年に上川隆也が演じており、2005年には“番外編”的な作品ではあったがテレビ朝日の『明智小五郎 VS 金田一耕助』でアイドルグループTOKIOの長瀬智也が金田一を演じた。ちなみにこの作品で明智小五郎を演じたのは同じくTOKIOのメンバーである松岡昌宏だった。

一方の明智小五郎であるが、既に戦前にも映画化がなされたことがあったが、やはり映像化の主は戦後である。1946年には大映で「心理試験」が映画化され、その後も松竹、大映で映画化がなされたが必ずしも興行的には成功とはいえない結果に終わっている。戦後の明智小五郎の映像化は、少年探偵団・怪人二十面相に依っている。1954年の松竹『怪人二十面相』、1954年～55年松竹『青銅の魔人』、1956年には東映『少年探偵団 第一部 妖怪博士』、一方TVでは1958年の『怪人二十面相』(日本テレビ)、1960年の『少年探偵団』などが放映されていたが、子どもがらみではない明智小五郎本人を中心に映像化されるのは、1970年のテレビ東京『江戸川乱歩シリーズ 明智小五郎』を待つことになる。この作品では滝俊介(溝口舜亮)が明智を演じている。その後、1972年にはNHKで『明智探偵事務所』(明智小五郎は、夏木陽介が演じた)が放映される。その後も少年探偵団を中心とした作品が放映され人気を博すが、1977年8月にテレビ朝日の「土曜ワイド劇場」枠で、天地茂演じる明智小五郎作品『水中の美女』(原作・『吸血鬼』)が放映された。この作品は視聴者から多大な人気を博し、その後長く続くシリーズ作品となった。

この天地演じる明智シリーズ(そのタイトルから美女シリーズと呼ばれた)は、天地の亡くなる1985

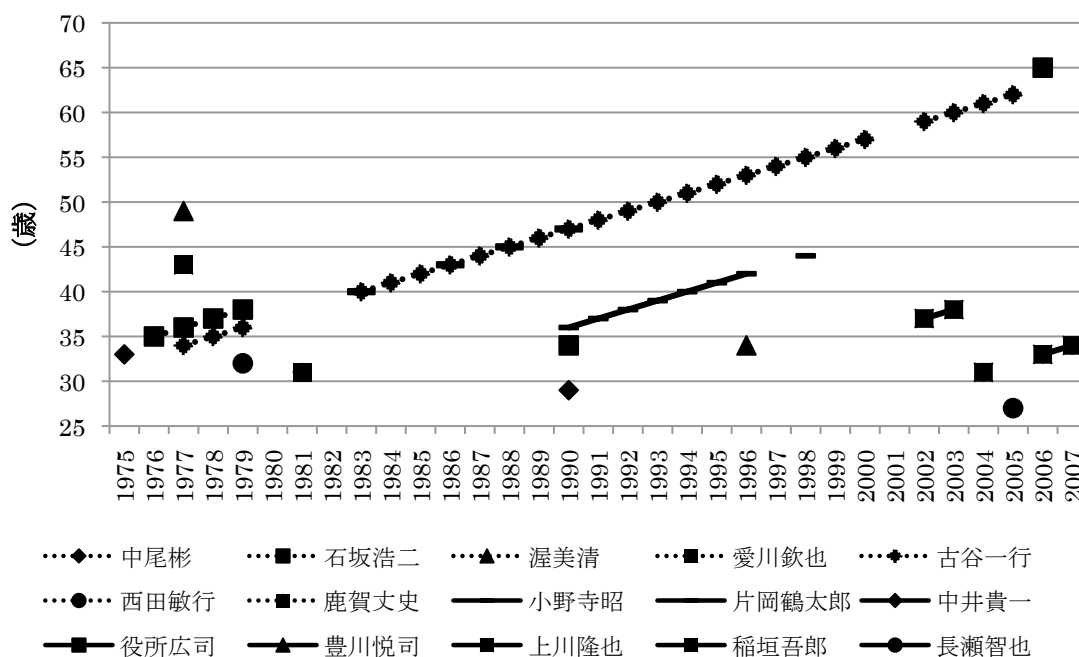


図1 TV・映画で金田一耕助を演じた役者の出演年と当時の年齢

年まで続くシリーズとなり、天地の没後は北大路欣也（1986～1990）、西郷輝彦（1992～1994）と受け継がれた。その後は、1998年にSMAPの稲垣吾郎が明智を演じて『陰獣』と『三角館の恐怖』が同じ土曜ワイド劇場枠で放送された（1998, 2000）。西郷・明智と稲垣・明智の間隙を縫うように1994年から1999年にかけては、フジテレビで、2時間ドラマの「金曜エンタテイメント」枠で、明智に陣内孝則を迎えた作品がシリーズ化されている。1990年代にはこの他にも、小野寺昭（TBS, 1990, 1991）、郷ひろみ（フジテレビ, 1992）、伊武雅刀（TBS, 1993）、佐野史郎（TBS, 1994）が、2時間、あるいは1時間の単発作品で明智を演じた。その後、2005年には、上述した『明智小五郎 VS 金田一耕助』で松岡昌宏が明智を演じている。

図1は、探偵ブームのきっかけとなった角川映画『犬神家の一族』以降のTV・映画で金田一耕助を演じた役者の出演年と当時の年齢をグラフにしたものである。（出演年は、『犬神家の一族』の前年の『本陣殺人事件』を含めるために1975年からとしている。また、役者の年齢は放映・公開年から誕生年を単純に引いたものなので、1歳程度の誤差がある場合がある）。

1975年以降、単発ドラマ、連続ドラマ、映画など、何らかの形で、ほぼ毎年、金田一耕助は映像として登場していることが分かる。とりわけ特徴的なのは古谷一行で、かれは1977年の金田一ブームのTVでの代表的な役者であるが、21世紀に入ってもなお、金田一を演じ続けている。2005年の作品では古谷は62歳になっているが、金田一耕助は最後の事件となる『病院坂の首縊りの家』では60歳になっており、金田一耕助の戦後のデビューの年齢とほぼ同年齢の34歳で初めて金田一を演じた古谷（『獄門島』の時金田一は34歳、古谷が初めて金田一を演じた『犬神家の一族』での金田一は37歳である）は、まさに金田一耕助として歳を加えてきたと言えるかもしれない。

図2は、同様に、TVにおける明智小五郎を演じた役者の出演年と当時の年齢をグラフで表わしたもので

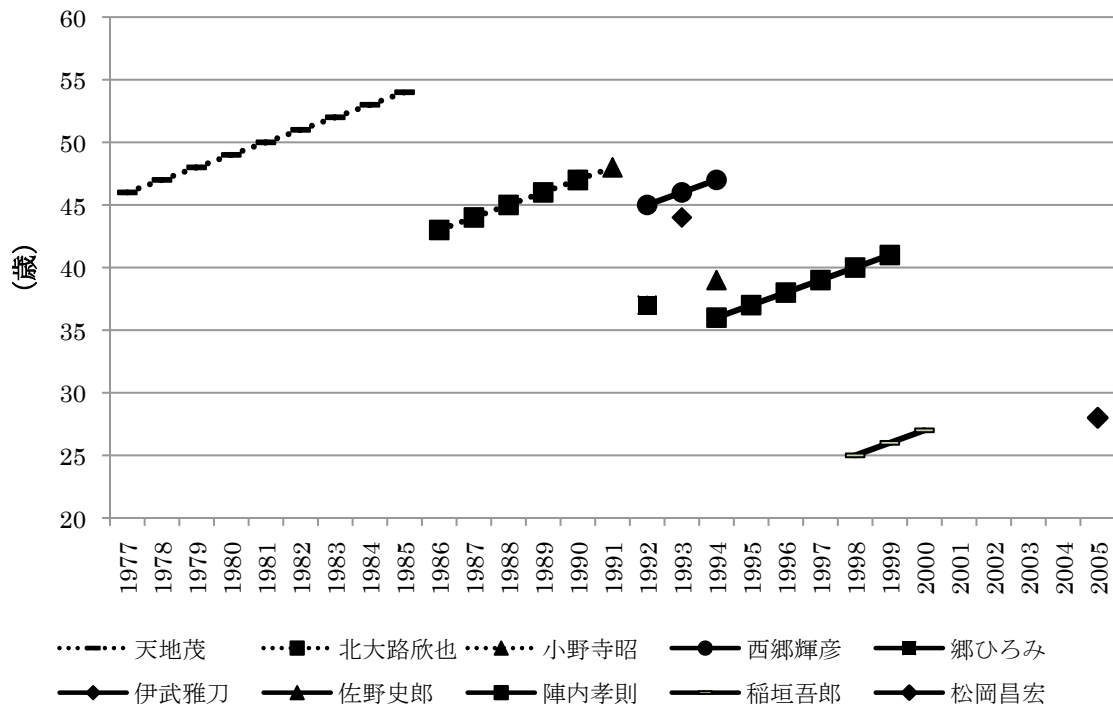


図2 TVで明智小五郎を演じた役者の出演年と当時の年齢

ある。映画でも明智小五郎の登場する作品は少なからず存在するが、乱歩の作品の映画化にあたっては、オムニバスになっているものや、カルト的なマイナー作品もあり、本小論での行論に何処までを含むか判断をためらう作品もあり、「お茶の間」で一般の多くの人々がそのヴィジュアルを眼にする可能性の高いTV作品にのみ限った（金田一耕助については、もともと金田一ブーム、探偵ブームを生み出したのが映画であり、映画の人気からTVドラマが作られた経緯があるため、映画を省くわけにはいかない）。明智も金田一同様、ほぼ毎年のように登場作品が放映されているが、その中心は「土曜ワイド劇場」枠で、最も人気の高かった天地茂による明智から北大路欣也、西郷輝彦、稲垣吾郎と引き継がれ、その間隙を小野寺昭、陣内孝則が埋めているという構成になっている。

### 浅見光彦の登場

明智が主人公としてTV作品で活躍するようになるのは、1970年代以降だが、小説の登場人物としては戦前にデビューし、舞台作品や、戦後のラジオ・テレビの「少年探偵団」作品を通して、明智小五郎は人々の間に良く知られた存在だった。映像の中に現れる名探偵としては、金田一は1970年代を代表する探偵である。

ところが、1980年代に入ると、金田一、明智の両雄に、浅見光彦という新たな名探偵が加わる。

浅見光彦は、推理小説作家内田康夫の手になる探偵で、1982年の『後鳥羽伝説殺人事件』（廣済堂出版）で初めて登場する素人探偵である。33歳独身、生業はフリーのルポライターとして旅行雑誌に記事を書いているが、母、兄夫婦と同居するパラサイト・シングルである。兄の洋一郎は官僚で刑事局長という要職にある。刑事局長を兄に持つ33歳の独身青年が、旅先で事件に巻き込まれ、素人探偵として事件を解決するのが基本パターンとなっている。内田康夫の浅見光彦シリーズの人気は高く、既に数十冊の小説が出版

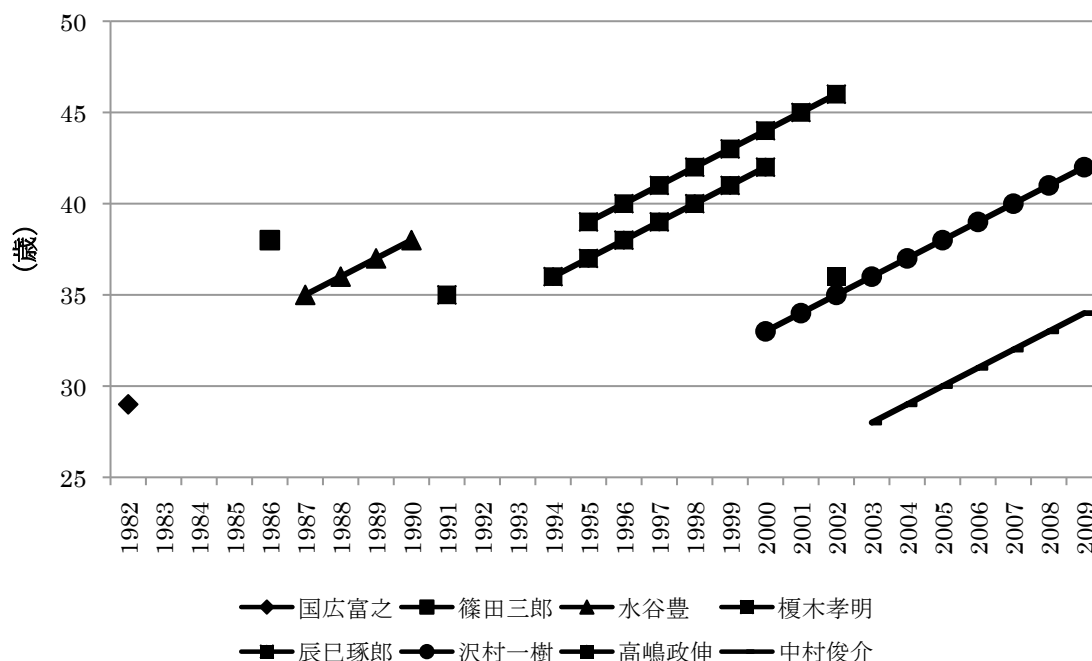


図3 TV・映画で浅見光彦を演じた役者の出演年と当時の年齢

されている。

この浅見がTVに登場するのは、早くは1982年に国広富之演じる『後鳥羽伝説殺人事件』、1986年には篠田三郎演じる『小樽殺人事件』が放映されているが、TVでの浅見光彦の人気を確定したのは、1987年から日本テレビで放映された水谷豊演じる浅見光彦である。TVでの浅見作品は、いずれも2時間枠の単発ドラマで（2009年に初めて、1時間ものの連続ドラマの放映が始まった）、水谷は1987年から1990年の間に8本の作品に出演している。

1991年には映画『天河伝説殺人事件』（角川映画）が公開され、榎木孝明が浅見を演じた。榎木は1995年からはフジテレビ系列での2時間枠の単発作品でも浅見を演じ、2002年までに14作品が放映されている。フジテレビの浅見光彦は2003年から中村俊介に引き継がれ、2008年9月までに18作品が放映され、今もなおシリーズは継続している。

このフジテレビの浅見シリーズと並行して、TBSでもやはり2時間枠の単発ドラマとして、1994年から、辰巳琢郎演じる浅見シリーズの放映が始まっている。辰巳は2000年まで13作品に出演し、その後を沢村一樹に引き継いでいる。沢村も2008年9月までに13作品に出演し、シリーズは今も継続中である。この他、2002年には高嶋政伸も浅見を演じている。

図3は、図1・図2と同様にTV・映画で浅見光彦を演じた役者の出演年と当時の年齢をグラフ化したものである。

ところで、浅見には明智、金田一にはない特徴があり、それは「加齢しない」探偵だということである。浅見は33歳の青年としてデビューするが、その後現在に至るまで常に33歳のまま、成長を止めている。シリーズの中では浅見の事件記録を小説として出版している作家先生が登場したり、探偵としての浅見の知名度がいくらかずつ上がったりとゆるやかな時間の経過は存在しているが、浅見は歳をとらない。したがって、その映像化の際には、役者の新陳代謝は明智、金田一以上にシビアになる。浅見初演時の水谷の年齢は35歳、榎木孝明は映画では35歳、テレビシリーズでは39歳が初演となる。辰巳琢郎もまた36歳であり水谷、榎木と同年齢だが、沢村は初演時33歳と浅見と同年齢、中村は28歳と浅見より5歳も年下であり、2009年においてようやく浅見の歳を越えたばかりである。

### 若返る名探偵

前節で既に浅見について見てしまったのだが、ここで名探偵を演じた役者の初演時の年齢について注目してみたい。

探偵本人の年齢は、明智小五郎は24歳でデビューするがその活躍は60歳ころまで続いていて、その姿も金田一耕助に似たボサボサ頭に和装の姿からダンディな背広姿までさまざまである。したがって探偵本人を代表するような活躍年齢は定めにくい。金田一耕助は20代半ばがデビューであるが、好んで映像化される『獄門島』、『悪魔が来りて笛を吹く』、『八つ墓村』、『犬神家の一族』等の事件は30代半ばから後半、『悪魔の手毬唄』の時に42歳である。浅見光彦は先に触れた通り、常に33歳を維持している。

一方彼らを演じた役者の初演の年齢を表にすると表1のようになる。この年齢を放映年を横軸にとってプロットしたものが図4である。図4には、年齢を放映年の従属変数とした近似直線も書き込んである。ここに見て取れるのは、同じ探偵を演じる役者の年齢が年とともに若くなっているという傾向である。とりわけ明智小五郎についてはそれが顕著で、1990年代前半までは40代の役者が演じていた明智を、90年

代後半になると 30 代、そして 20 代の役者が演じるようになっていく。主たる活躍年齢が 30 代後半の金田一耕助は、ほぼ金田一自身の年齢に近い役者が演じているが、やはり年代が進むにつれてやや若い役者が演じることが多くなる傾向は見て取れる。また、上川隆也のように実年齢に較べてその容貌が若い印象を与える役者が起用されていたりする。

表 1 探偵を演じた役者とその初演時年齢

金田一耕助		明智小五郎		浅見光彦	
役者	年齢	役者	年齢	役者	年齢
中尾彬	33	天地茂	46	国広富之	29
石坂浩二	35	北大路欣也	43	篠田三郎	38
渥美清	49	小野寺昭	47	水谷豊	35
愛川欽也	43	西郷輝彦	45	榎木孝明	35
古谷一行	34	郷ひろみ	37	辰巳琢郎	36
西田敏行	32	伊武雅刀	44	榎木孝明	39
鹿賀丈史	31	佐野史郎	39	沢村一樹	33
小野寺昭	40	陣内孝則	36	中村俊介	28
片岡鶴太郎	36	稲垣吾郎	25		
中井貴一	29	松岡昌宏	28		
役所広司	34				
豊川悦治	34				
上川隆也	37				
稲垣吾郎	31				
長瀬智也	27				

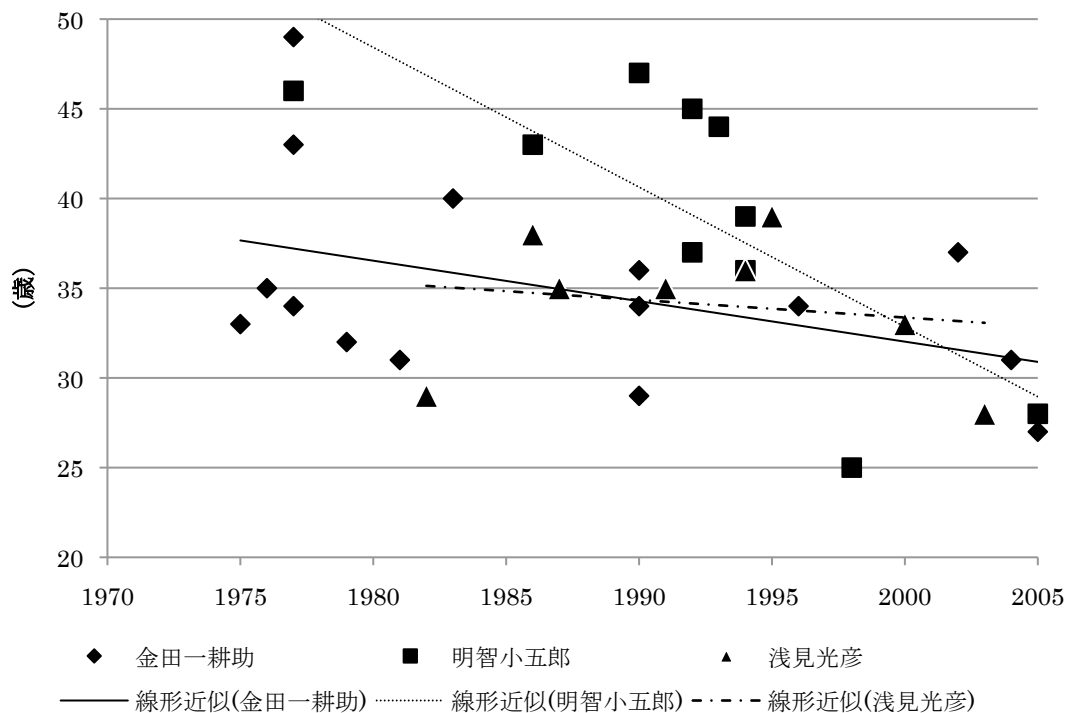


図 4 初演時年齢と放映・公開年

浅見光彦は年齢が33歳と確定しているために、ほぼその年齢に近い役者が演じているが、浅見の場合は、明智、金田一自体から比較してそもそもの年齢の設定が若い。

このデータからは、名探偵の若返り傾向が見て取れる。

### おわりに

1995年、日本テレビ系列で2時間の単発ドラマ『学園七不思議殺人事件』が放映された。この作品は好評で、その後連続ドラマ化され、断続的に2005年まで放送が続いた。この作品の探偵は「金田一耕助の孫」という設定の高校生、金田一一（はじめ）であった。また、30分の連続アニメ作品だが、1996年からは『名探偵コナン』の放映が始まり、この作品は今なお放映が続いている。この作品に登場する探偵は、小学生の江戸川コナン、ただし彼は、高校生にして著名な名探偵工藤新一が特殊な薬物によって小学生に変化させられてしまったという設定になっている。アニメのオープニングのナレーションでは「たったひとつの真実見抜く、見た目は子ども、頭脳は大人。その名は名探偵コナン」と紹介されていた。『名探偵コナン』には、毛利小五郎という、こちらは正しく大人の探偵が登場するが、彼は探偵としての才能は並、酒と女にだらしなく、娘に頭が上がらず、ただ人間は善良という人物として描かれている。謎解きの場面では、コナンの傀儡となって謎を人前で解いてみせるために、世間では「名探偵」と呼ばれている。

1970年代、30代後半から40代であった名探偵が1980年代には30代前半のパラサイト・シングルに、1990年代には17、8歳の高校生にまで若返っていく。

たかが映画、テレビの中のことであり、プロダクションの事情、放送局の事情など多くの要因の中で配役は決まってしまうものではある。しかし、その作品が人気を保ち長寿を保っているということは、そこに人々に訴求する何かがあるということでもある。この小論で検討してみたいと考えたのは、人々が「名探偵」に対してリアリティを感じる年齢の変化であった。「名探偵」とは、警察の科学捜査、物的証拠を追う捜査では見逃してしまう真相を、推理力によって見抜く者のことであり、すぐれた知的能力、論理的思考力を持つと同時に、人生や人間の感情や機微にも精通している人物としてイメージされる。そうした人物のイメージは、ある年齢まで人生を過ごしてきた人物、各種の経験をしてきた人物、即ち「大人」であったはずだ。その「大人」の年齢が下がってきている、あるいは言い換えれば「大人」の持っている属性に期待がなされていない。名探偵が真相を暴くのに「大人」の知恵は必要ではなく、若さこそが重要なのだと、イメージされ始めている。その期待されるイメージの変化が、兄夫婦の家に居候する30過ぎの良家の青年や高校生に「名探偵らしさ」を感じさせ、人々に訴求する。それは18歳を越えると「おばさん」と感じる感覚と当然シンクロしている。「大人」とは叡智の記号ではなく、「旬を過ぎたもの」の言いである。そんな時代の空気が、使い捨て的な2時間ドラマ、娯楽映画の中にも現れている。

### 引用文献

平山雄一． 2009． 「明智小五郎年代学とその周縁」 住田忠久（編著）． 2009． 『明智小五郎読本』（長崎出版株式会社）, pp. 36-142.



なお、探偵の年齢、番組の放映年等は以下の資料を参照した。また、役者の生年については Wikipedia、役者の公式サイトを参照した。

江藤茂博・山口直孝・浜田知明（編）． 2009． 『横溝正史研究 創刊号』（戎光祥出版株式会社）．

住田忠久（編著）． 2009． 『明智小五郎読本』（長崎出版株式会社）．

金田一耕助博物館 <http://www.yokomizo.to/index.htm>（2009-06-01 確認）

内田康夫公認浅見光彦倶楽部公式サイト浅見光彦の家「浅見光彦シリーズ映像化の歴史と今後の予定」

<http://members.jcom.home.ne.jp/hanakan/R26.htm>（2009-06-01 確認）